

都留市埋蔵文化財調査報告第11集

牛 石 遺 跡

農道牛石線改良工事に伴う発掘調査報告書

1987. 3

都 留 市 教 育 委 員 会

都 留 土 地 改 良 事 務 所

都留市埋蔵文化財調査報告第11集

牛 石 遺 跡

農道牛石線改良工事に伴う発掘調査報告書

1987. 3

都 留 市 教 育 委 員 会

都 留 土 地 改 良 事 務 所

序

本書は、昭和60・61年度にわたって実施された牛石遺跡の発掘調査報告であります。

この牛石遺跡は、昭和54・55年にも圃場整備事業に伴い発掘調査を実施し、この時には、直径50mにおよぶ国内でも有数の規模を持つ大環状配石遺構が発見され、話題になりました。

今回の調査は、牛石遺跡がある厚原地区の中央を東西に走る農道牛石線の改良工事に伴い実施されたもので、この道路が以前発見された大環状配石遺構に近接しているため、調査の成果に期待が持たれました。

調査の結果、その対象地は限定されたものでありましたが、大環状配石遺構と同時期の住居址などの生活址が発見されるなど、大きな成果を得ることができました。

おわりに、ご指導、ご協力を賜りました県文化課、都留土地改良事務所、並びに、いつもながら献身的に調査に参画頂いております都留文科大学考古学研究会のみなさんに対し心から敬意と感謝の意を表す次第であります。

昭和62年3月31日

都留市教育委員会

教育長 内 藤 盈 成

例 言

1. 本書は、昭和60・61年度に、都留土地改良事業所との負担協定及び文化庁、山梨県より補助金を受けて、都留市教育委員会が実施した農村総合整備事業農道牛石線改良舗装工事に伴う牛石遺跡の緊急調査報告である。
2. 本書の作成は、都留市教育委員会が行った。執筆・編集は、奈良泰史が担当し、図版の作成は、小林安典と都留文科大学考古学研究会が行った。
3. 遺物及び実測図は、都留市教育委員会が保管している。
4. 本調査の調査組織は、別に示すとおりである。
5. 発掘調査・報告書作成にあたって、次の諸氏に御教授を賜った。(敬称略)
未木 健・新津 健(山梨県文化課)・米田明訓(県埋文センター)
堀内 真(富士吉田市教育委員会)・天野保子(西桂町教育委員会)
谷口 栄・甲斐博之(葛西城址調査会)

調 査 組 織

1. 調査主体者 都留市教育委員会
2. 調査担当者 奈良泰史(都留市教育委員会)
3. 調査員 小林 安典・奥山 和久
4. 補助員 高橋広子・菊池保江・荻沼美和子・尾形英子・岩淵マス子・谷口真弓・森田美香・梶原ゆかり・塚原佳世子・原 陽子・上橋英和・小山若葉
5. 作業員 天野治彦・小林利典・入江和成・宮下守観・稲本和己・森島ゆき・奥秋本江・樋田吉則・宇佐美秀之・横田恵一・川西希実子・森島すみ子・伊部泰彦・阿部良作・加藤浩文・古屋 久・三好一史・森田みか・正木一喜・奥秋宅也・占川初美・山口裕二・菅野康一・横田恵一・川西希実子・中田路代・徳丸英紀・日高泰子・野井 純・古屋 久・新妻伸浩・小俣 恵・志村昭二・小俣定信・宮下延子・相川仁一・阿部一夫・三井 護・渡辺 豊・武井 護
6. 整理員 梶原ゆかり・塚原佳世子・原 陽子・土橋美和・森田美香・小山若葉・菅原 真・塚本 聡・岡田晃子
7. 事務局 社会教育課長 日向丈夫
係長 河口智範
係 奈良泰史
藤江きく江

目 次

序

都留市教育委員会教育長 内藤 盈成

例 言

調査組織

I 調査に至る経緯

1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の経過	1
日 誌	1

II 遺跡の位置・歴史的環境

1. 遺跡の位置と立地	7
2. 遺跡の考古学的環境	7

III 発掘調査の成果と概要

1. 調査地区の概要	9
2. トレンチ調査の成果と概要	9
(1) No.1 トレンチ	9
(2) No.2 トレンチ	9
(3) No.3 トレンチ	10
(4) No.4 トレンチ	11
(5) No.5 トレンチ	11
(6) No.6 トレンチ	12
(7) No.7 トレンチ	13
(8) No.8 トレンチ	14
(9) No.9 トレンチ	15
3. 拡張区調査の成果と概要	16
(1) 第1拡張区	16
(2) 第2拡張区	31

IV ま と め

挿 図 目 次

第1図	発掘調査風景	2
第2図	発掘調査風景	2
第3図	発掘調査風景	3
第4図	発掘調査風景	4
第5図	調査区全体図	5
第6図	牛石遺跡の位置	6
第7図	牛石遺跡遠景	7
第8図	牛石遺跡発見の配石遺構	8
第9図	No.1 トレンチ土層図	9
第10図	No.2 トレンチ土層図	9
第11図	No.3 トレンチ土層図	10
第12図	No.3 トレンチ出土土器	10
第13図	No.4 トレンチ土層図	11
第14図	No.4 トレンチ出土土器	11
第15図	No.5 トレンチ土層図	12
第16図	No.6 トレンチ土層図	12
第17図	No.6 トレンチ出土土器	13
第18図	No.7 トレンチ土層図	13
第19図	No.7 トレンチ出土土器	14
第20図	No.8 トレンチ土層図	15
第21図	No.8 トレンチ出土土器	15
第22図	No.9 トレンチ土層図	15
第23図	第1拡張区位置図	16
第24図	第1拡張区全体図	16
第25図	第1号住居址遺構図	17
第26図	第1号住居址出土土器(1)	18
第27図	第1号住居址出土土器(2)	19
第28図	第1号住居址出土土器(3)	20
第29図	第1号住居址出土土器	20
第30図	第2・3号住居址遺構図	21
第31図	第2号住居址出土土器	22
第32図	第2号住居址出土土器	23
第33図	第3号住居址出土土器	24

第34图	第3号住居址出土石器	24
第35图	第1拡張区出土土器(1)	25
第36图	第1拡張区出土土器(2)	26
第37图	第1拡張区出土土器(3)	27
第38图	第1拡張区出土土器製品	28
第39图	第1拡張区出土石器(1)	29
第40图	第1拡張区出土石器(2)	30
第41图	第2拡張区位置图	31
第42图	第2拡張区全体图	31
第43图	第2拡張区配石遺構图	32
第44图	第2拡張区出土土器(1)	32
第45图	第2拡張区出土土器(2)	33
第46图	第2拡張出土石器	34

図 版 目 次

- 図版—1 調査前の農道牛石線
発掘調査風景
- 図版—2 第1地区 発掘調査風景
第1号住居址
- 図版—3 第1号住居址（石囲い炉）
第2号住居址
- 図版—4 第2号住居址（埋甕出土状態）
第2号住居址（ビット）
- 図版—5 第3号住居址
第2地区調査風景
- 図版—6 第2地区 配石出土状態
第2地区 配石出土状態
- 図版—7 トレンチ出土土器
（上段No.3 トレンチ，中段No.4 トレンチ，下段No.6 トレンチ）
- 図版—8 トレンチ出土土器（上段No.7 トレンチ，下段No.8 トレンチ）
- 図版—9 第1号住居址出土土器（1）
- 図版—10 第1号住居址出土土器（2）
- 図版—11 第1号住居址出土土器（3）
- 図版—12 第1号住居址出土石器
- 図版—13 第2号住居址出土土器
- 図版—14 第2号住居址出土土器（上段）・第3号住居址出土土器（下段）
- 図版—15 第1地区出土土器（1）
- 図版—16 第1地区出土土器（2）
- 図版—17 第1地区出土土器（3）
- 図版—18 第1地区出土土製品（上段）・石器（下段）
- 図版—19 第2地区出土土器（1）
- 図版—20 第2地区出土土器（2）
- 図版—21 第2地区出土石器

I 調査に至る経緯

1. 調査に至る経緯

都留市厚原地区は、13haにおよぶ平坦地が広がっており、昭和54～56年に圃場整備事業が実施され、整然と区画された水田地帯となっている。

昭和60年、この厚原地区に、生産基盤を整備し生産性の高い農業の育成と高福祉農村の建設をめざす農村総合整備事業として、同地区の中央を通る農道牛石線の改良舗装工事が、都留土地改良事務所によって計画され、昭和60年5月1日、文化財保護法第57条の3第1項の規定による埋蔵文化財発掘が提出された。

これを受けて、県文化課、都留土地改良事務所、当教育委員会の三者で協議を行なったところ、発掘調査は当教育委員会があたり、昭和60年度は、工事予定地2800㎡の内半分を対象として、昭和61年度には残り地区と報告書の作成を実施することになった。

2. 調査の経過

本調査は、事業主体者である都留土地改良事務所との発掘調査費に関する協定に基づき、都留土地改良事務所からの負担金と文化庁・県文化課からの補助金を得て、当教育委員会が調査主体者となり調査に当たった。

昭和60年度は、昭和60年12月1日より昭和61年2月20日まで、昭和61年度は、昭和61年7月19日より昭和62年2月16日まで実施した。

(日 誌)

昭和60年度

12月1日(日)	器材搬入。トレンチ設定(No1～No4トレンチ)
3日(火)	道路進入禁止立札の設置。調査地区の整理。
4日(水)	No1トレンチ調査開始。第I層調査。
5日(木)	No1～2トレンチ調査。第I層調査。
6日(金)	No1～3トレンチ調査。第I～II層調査。
7日(土)	No1～4トレンチ調査。第I～II層調査。
8日(日)	No1～4トレンチ調査。第II層調査。
9日(月)	No1～4トレンチ調査。第II～III層調査。
10日(火)	No1～4トレンチ調査。第III層調査。
11日(水)	No1～4トレンチ調査。第III～IV層調査。
12日(木)	No1～4トレンチ調査。第III～IV層調査。
13日(金)	No1～4トレンチ調査。第IV～V層調査。

- 12月14日(土) No 1～2トレンチ拡張準備。No 3～4トレンチ、セクション図作成準備
- 15日(日) No 1～4トレンチ、セクション図作成
- 16日(月) No 5・6トレンチ調査開始。No 3～4トレンチ埋戻し。
- 17日(火) No 5・6トレンチ調査。No 3～4トレンチ埋戻し。
- 18日(水) No 1～2トレンチを拡張し、第1拡張区と命名する。第1拡張区の調査を開始する。
- 19日(木) 第1拡張区調査。No 5・6トレンチ調査。
- 20日(金) 第1拡張区調査。No 5・6トレンチ調査。
- 21日(土) 第1拡張区調査。No 5・6ト
- 22日(日) 第1拡張区調査。No 5・6ト
- 23日(月) 第1拡張区調査。No 5・6ト
- 24日(火) 第1拡張区調査。No 5・6ト
- 25日(水) 第1拡張調査。No 5トレンチから配石址検出。
- 26日(木) 第1拡張区、ピット調査。No 5トレンチを中心として拡張区を設定し調査を開始。
- 27日(金) 第1拡張区、ピット調査。
- 1月6日(月) 第1拡張区、ピット調査。第2拡張区調査。
- 7日(火) 第1拡張区、粗石状配石遺構検出。第2拡張区調査。
- 8日(水) 第1拡張区、第1号住居址検出。第2拡張区調査。
- 9日(木) 第1拡張区、第1号住居址調査。第2拡張区調査。
- 10日(金) 第1拡張区、第1号住居址調査。第2拡張区、配石検出。
- 11日(土) 第1拡張区、第1号住居址調査。第2拡張区、配石調査。
- 12日(日) 第1拡張区、第1号住居址調査。第2拡張区、配石調査。
- 13日(月) 第1拡張区、第1号住居址調査。第2拡張区、配石遺構実測。
- 14日(火) 第1拡張区、第1号住居址調査。第2号住居址検出。第2拡張区、配石遺構実測。
- 15日(水) 第1拡張区、第1・2号住居址調査。第3号住居址検出。A-7・8区の掘り下げ。



第1図 発掘調査風景



第2図 発掘調査風景

- 1月16日(木) 第1拡張区、第2・3号住居址調査。第2拡張区、埋戻し。
- 17日(金) 第1拡張区、第2・3号住居址精査、写真撮影。
- 18日(土) 第1拡張区、第2・3号住居址平面図作成。
- 19日(日) 埋戻し開始。
- 20日(月) 埋戻し開始。図面整理、出土遺物整理。
- 21日(火) 埋戻し開始。図面整理、出土遺物整理。
- 22日(水) 埋戻し開始。図面整理、出土遺物整理。
- 23日(木) 埋戻し開始。図面整理、出土遺物整理。
- 24日(金) 整地。図面整理、出土遺物整理。
- 25日(土) 整地。図面整理、出土遺物整理。
- 26日(日) 整地。図面整理、出土遺物整理。
- 27日(月) 整地。図面整理、出土遺物整理。
- 28日(火) 整地。図面整理、出土遺物整理。
- 29日(水) 現場プレハブの整理、図面整理、出土遺物整理。
- 30日(木) 現場プレハブの整理、図面整理、出土遺物整理。
- 31日(金) 発掘器材の搬出。図面整理、出土遺物整理。
- 2月1日(土) 出土遺物及び図面の整理。
- 2日(日) 出土遺物及び図面の整理。
- 3日(月) 出土遺物及び図面の整理。
- 4日(火) 出土遺物及び図面の整理。
- 5日(水) 出土遺物及び図面の整理。
- 6日(木) 出土遺物及び図面の整理。
- 7日(金) 出土遺物及び図面の整理。
- 8日(土) 出土遺物及び図面の整理。
- 10日(月) 出土遺物及び図面の整理。
- 11日(火) 出土遺物及び図面の整理。
- 12日(水) 出土遺物及び図面の整理。
- 13日(木) 出土遺物及び図面の整理。
- 14日(金) 出土遺物及び図面の整理。
- 15日(土) 出土遺物及び図面の整理。
- 17日(月) 出土遺物及び図面の整理。
- 18日(火) 出土遺物及び図面の整理。



第3図 発掘調査風景

- 2月19日(水) 出土遺物及び図面の整理。
 20日(木) 出土遺物及び図面の整理。

昭和61年度

- 1月8日(木) 牛石1059・1058番地の水田前の道路に2m×6mのトレンチ(No7トレンチ)を設定し、調査に入る。かたい表土層の除去に終始する。
- 9日(金) 表土層の除去がほぼ終わり、第Ⅱ層の調査に入る。
- 10日(土) 第Ⅱ層から第Ⅳ層の調査に入る。
- 16日(金) 第Ⅳ層から第Ⅴ層の調査に入り、Ⅴ層までの調査は終了した。精査の後、写真撮影をおこないセクション図を作成。
- 17日(土) 埋戻し作業をおこないNo7トレンチの調査を終了する。
- 19日(月) 牛石1074・1075番地の水田前の道路にNo8トレンチ、牛石1088・1089番地の水田前の道路にNo9トレンチの2つのトレンチ(各2m×6m)を設定し、表土層の除去に入る。
- 20日(火) No8・9トレンチとも表土層から第Ⅱ層の調査に入る。
- 21日(水) No8トレンチは、第Ⅱ層から第Ⅲ層に入り、No9トレンチは、第Ⅳ層に入る。
- 22日(木) No8トレンチは、第Ⅲ層から第Ⅳ層に入り、No9トレンチは、第Ⅴ層に至り、精査の後、写真撮影する。
- 23日(金) No8トレンチは、第Ⅳ層から第Ⅴ層の調査を終了し、精査の後、写真撮影をおこないセクション図の作成をおこない、埋め戻し作業を行う。No9トレンチも埋め戻し作業を行う。
- 26日(月) 出土遺物の洗いを始める。
- 27日(火) 出土遺物の洗い。
- 28日(水) 出土遺物の洗い。
- 29日(木) 出土遺物に注記を行う。
- 30日(金) 出土遺物の注記及び図面整理。
- 2月2日(月) 出土遺物の拓本及び図面整理。
- 3日(火) 出土遺物の拓本及び図面トレース。
- 4日(水) 出土遺物の実測及び図面トレース。
- 5日(木) 出土遺物の実測及び図面トレース。
- 6日(金) 図版作成。

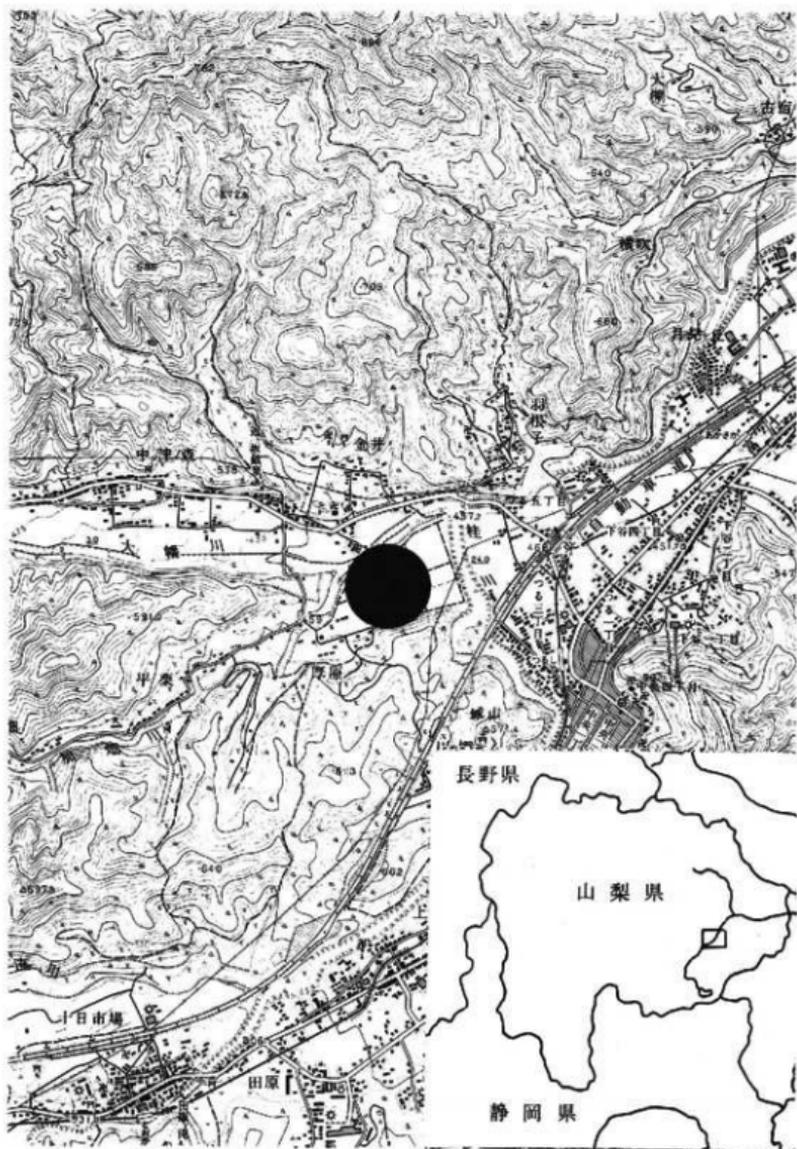


第4図 発掘調査風景

- 2月7日(土) 出土遺物洗い。
 8日(日) 出土遺物洗い。
 9日(月) 出土遺物注記。
 10日(火) 出土遺物注記及び図面整理。
 11日(水) 出土遺物拓本。
 12日(木) 出土遺物拓本。
 13日(金) 出土遺物拓本及び図面トレース。
 14日(土) 出土遺物実測及び図面トレース。
 15日(日) 出土遺物実測及び図面トレース。
 16日(月) 図版作成。



第5図 調査区全体図



第6図 牛石遺跡の位置

Ⅱ 遺跡の位置・歴史的環境

1. 遺跡の位置と立地

中部山岳地帯の南東に位置する山梨県は、関東山地から連なる御坂山地によって、地形上、甲府盆地を中心とした富士川水系に属する地域と、相模川・多摩川両水系に属する山梨県東部の二つの地域に隔てられている。

山梨県東部域は、山間地で平坦地が少ないが、河岸段丘上や緩斜面に数多くの遺跡が立地している。

富士山の豊富な湧水を源として山梨県東部を流れる桂川は、都留市内において柄杓流川・菅野川・朝日川・大幡川等の各支流と合流する。この各流域にはそれぞれ河岸段丘が発達し、縄文時代を中心に、数多くの遺跡が立地している。

牛石遺跡は、都留市厚原字牛石に所在し、桂川と大幡川に挟まれた河岸段丘上に立地する縄文時代から歴史時代に渡る集落址である。

2. 遺跡の考古学的環境

牛石遺跡は、これまで3次にわたって、圃場整備事業に伴うものとして、発掘調査が実施されている。



第7図 牛石遺跡遠景

第1次調査は、昭和54年5月から8月まで、段丘の東側半分を対象として実施し、奈良・平安時代の住居址23軒が検出された。

第2次調査は、昭和55年7月から9月まで、残りの西側半分を対象に、遺跡の範囲確認を主眼として実施し、大規模な配石遺構の存在が確認された。

第3次調査は、第2次調査で確認された配石遺構の主体部を全掘することを目的として実施し、直径50mにおよぶ大環状配石を中心とする縄文時代中期末葉の配石遺構群が検出された。

3度にわたる調査によって、厚原地区の東側半分には奈良・平安時代の集落址の存在が確認され、西側には縄文時代中期末葉の大環状配石遺構を中心とする配石遺構群が検出されたが、調査は厚原地区全域にわたるものでなく、牛石遺跡の全貌を明らかにするものではなかった。

特に、縄文時代中期末葉の配石遺構では、これに伴う住居址など集落址の存在が確認されていないために、大環状配石遺構を中心とする配石遺構群の性格を考える上では、不十分なものであった。

牛石遺構からは、今までの調査で、縄文時代早期末葉期から同時代中期末葉までの遺物が、また、遺構では、配石遺構の他に、同時代中期後葉曾利Ⅱ式期の住居址が1軒検出されている。縄文時代中期以降、遺物・遺構とも検出されず、続いて検出されているのは弥生時代中期の遺物と遺構で、同時期の住居址が3軒発見されている。弥生時代中期以降は、8世紀に入るまで、遺物・遺構とも検出されていない。8世紀以降、厚原地区に大規模な集落址が営まれたものと推察されるが、いつしか、同地区は人の住まないすすきの原と化してしまい、現在のように水田や畑地となったのは、大正年間の耕地整理以降である。



第8図 牛石遺跡発見の配石遺構

Ⅲ 発掘調査の成果と概要

1. 調査地区の概要

今回の調査は、厚原地区の中央を走る農道牛石線の舗装改良工事に伴うもので、巾7mの道路の中央に2m×6mのトレンチを9カ所（昭和60年度はNo1～No6トレンチ、昭和61年度はNo7～No9トレンチ）設定し、調査に当たった。

これらの内、No1・2トレンチおよびNo5トレンチからは、遺構の存在が確認されたために、拡張区を設定（No1・2トレンチを中心に第1拡張区、No5トレンチを中心に第2拡張区）し、調査に当たった。

2. トレンチ調査の成果と概要

(1) No1トレンチ

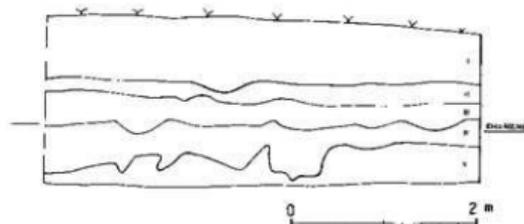
第I層 瓦礫混りの土層で、道路敷となっていた土層である。

第II層 褐色土層で、かつての耕作土と思われる。

第III層 粘性が弱く、若干スコリアが含有した黒色土層である。

第IV層 スコリアを多量に含有した暗褐色土層である。

第V層 スコリア・褐色土ブロックを多量に含有した暗茶褐色土層で、縄文時代中期の遺物がかんり出土した。また、本層中にて、焼土や炭化物がかんり認められたため、トレンチ調査を終了した。



第9図 No.1トレンチ土層図

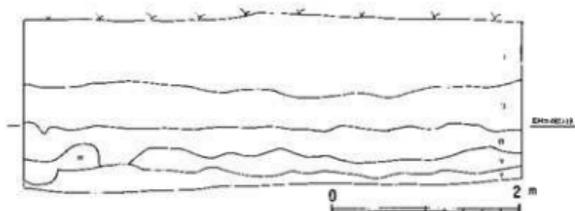
(2) No.2トレンチ

第I層 瓦礫混りの土層で、道路敷となっていた土層である。

第II層 褐色土層で、かつての耕作土と思われる。

第III層 粘性が弱く、若干スコリアが含有した黒色土層である。

第IV層 スコリアを多量に含有した暗褐色土層で、本層中より縄文時代中期の遺物が出土した。



第10図 No.2トレンチ土層図

第V層 スコリア・褐色土ブロックを多量に含有した暗茶褐色土層で、本層中より縄文時代中期曾利式期の遺物が、かなり出土した。また、焼土の広がりが見出されたために、トレンチ調査を終了した。

(3) No.3 トレンチ

牛石1027-1番地と1028番地

水田の間に設定した。

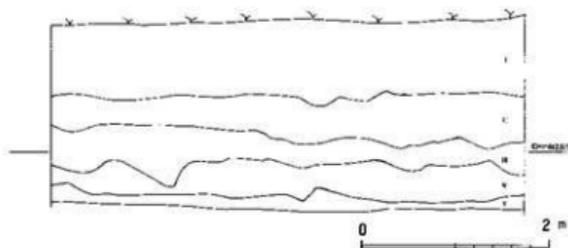
土層(第11図)

第I層 瓦礫混りの土層で、道路敷となっていた土層である。

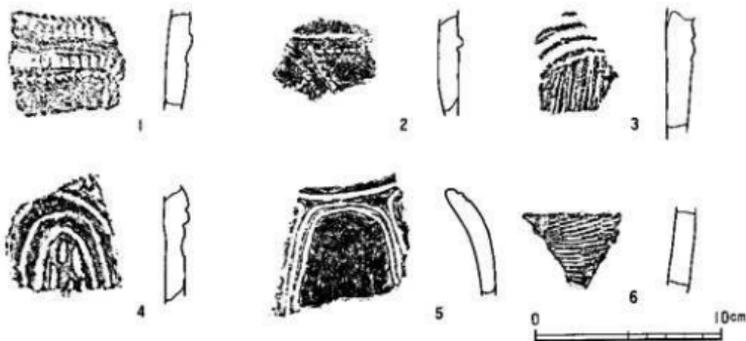
第II層 褐色土層で、かつての耕作土と思われる。

第III層 粘性が弱く、若干スコリアが含有した黒色土層で、須恵器・土師器の小破片が若干出土した。

第IV層 スコリアを多量に含有した暗褐色土層である。



第11図 No.3 トレンチ土層図



第12図 No.3 トレンチ出土土器

第Ⅴ層 スコリア・褐色土ブロックを多量に含有した暗茶褐色土層で、本層中より縄文時代中期の遺物が若干出土した。

遺物(第12図)

1・2は、押し文と隆線文が施されたもので縄文時代中期中葉釜式土器に、3は条線を地文として、渦巻状の隆線が施されたもので同時代中期後葉曾利Ⅱ式に、4・5は棒状施文具によって区画文が施されたもので、同曾利Ⅴ式に、それぞれ比定されるものと思われる。

6は、タタキ目整形が施された須恵器片である。

(4) No.4 トレンチ

牛石1027-2と1028番地水田

の間に設定した。

土層(第13図)

第Ⅰ層 瓦礫混りの土層で、道路敷となっていた土層である。

第Ⅱ層 褐色土層で、かつての耕作土と思われる。

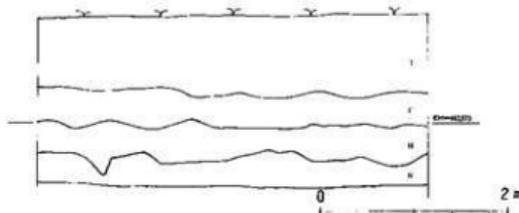
第Ⅲ層 粘性が弱く、若干スコリアを含有した黒色土層である。

第Ⅳ層 スコリアを多量に含有した暗褐色土層である。

第Ⅴ層 スコリア・褐色土ブロックを多量に含有した暗茶褐色土層で、本層中より縄文時代中期の土器片が若干出土した。

遺物(第14図)

1は、ヘラ状施文具による連続刺突文が施され、縄文時代中期中葉新道式に、また、2は、口縁部破片で半截竹管によって重弧文が施文され、同時代中期後葉曾利Ⅱ式に、それぞれ比定されるものと思われる。



第13図 No.4 トレンチ土層図



第14図 No.4 トレンチ出土土器

(5) No.5 トレンチ

牛石1040と1039-3番地水田の間に設定した。

土層(第15図)

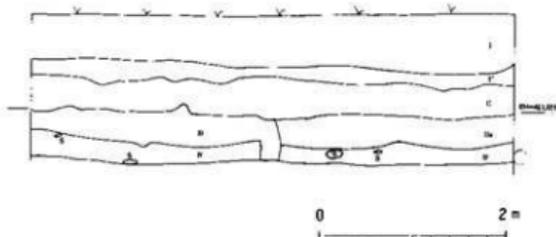
第Ⅰ層 瓦礫混りの土層で、道路敷となっていた土層である。

第Ⅱ層 褐色土層で、かつての耕作土と思われる。

第IIa層 黒色土の小ブロックを混在した褐色土層である。

第III層 粘性が弱く、若干スコリアを含有した黒色土層である。

第IV層 スコリアを多量に含有した暗褐色土層で本層中より、縄文時代晩期初頭安行3a式期の浅鉢をはじめ、かなりの遺物が出



第15図 No. 5 トレンチ土層図

した。また、配石遺構と思われる礫の配列が検出され、トレンチ調査を終了した。

(6) No. 6 トレンチ

牛石1048と1049番地水出の間に設定した。

土層 (第16図)

第I層 瓦礫混りの土層で、道路敷となっていた土層である。

第I'層 瓦礫が少ない茶褐色土層である。

第II層 褐色土層で、かつての耕作土と思われる。

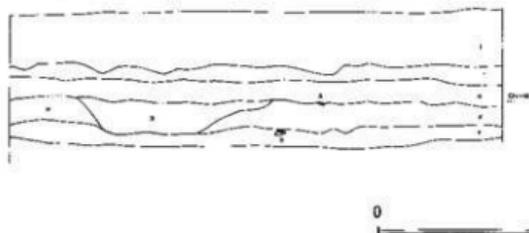
第III層 粘性が弱く、若干スコリアを含有した黒色土層である。本トレンチでは、部分的にしか、認められなかった。

第IV層 スコリアを多量に含有した暗褐色土層で、本層中より縄文時代中期後葉の曾利式期の遺物が出土した。

第V層 スコリア・褐色土ブロックを多量に含有した暗茶褐色土層で、縄文時代中期初頭五領ヶ台式土器及び同中葉猪沢式・井戸尻式期の土器片が出土した。

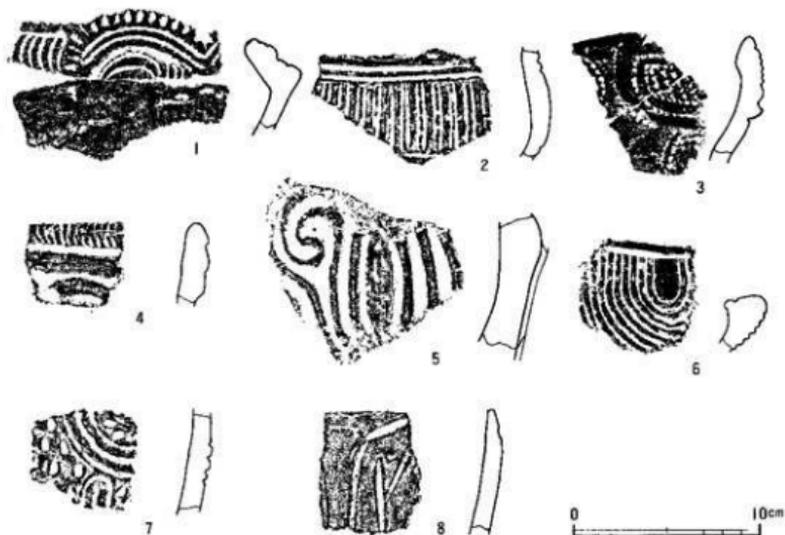
遺物 (第6図)

1・2は、半截竹管によって次線文が施されたもので、縄文時代中期初頭五領ヶ台式に、3は、口縁部破片で、楕円状の横帯区間文と角押文が施されたもので、同時代中期中葉の猪沢式に、4・5は



第16図 No. 6 トレンチ土層図

口縁部破片で、同井戸尻式に、6～8は、同時代中期後葉曾利式に、それぞれ比定されるものと思われる。



第17図 No. 6 トレンチ出土土器

(7) No. 7 トレンチ

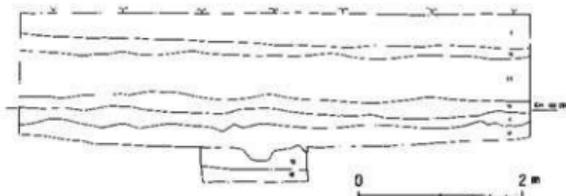
牛石1048と1049番地水田の間に設定する。

土層 (第18図)

第Ⅰ層 瓦礫混りの上層で、道路敷となっていた土層である。

第Ⅱ層 褐色土層で、かつての耕作土と思われる。

第Ⅲ層 粘性が弱く、若干スコリアを含有した黒色土層である。



第18図 No. 7 トレンチ土層図

第Ⅳ層 スコリアを多量に含有した暗褐色土層である。

第Ⅴ層 スコリア・褐色土ブロックを多量に含有した暗茶褐色土層である。

第Ⅵ層 黒褐色土層（F・B層）である。

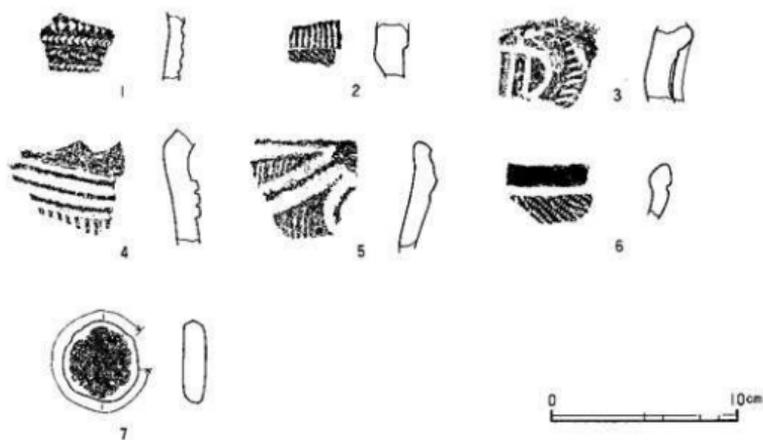
第Ⅶ層 ソフトローム層である。

第Ⅷ層 ローム層である。

遺物（第19図）

本トレンチからは、小破片の土器片が若干出土したのみであった。

1は、竹ペン状の鋭い工具によって連続刺突文が施され、縄文時代中期中葉新道式に、2は、隆線上にヘラ状工具によって爪形状の連続刺突文が施され、同時期藤内式に、3は口縁部破片で、同じく藤内式に、4・5は、4が胴部破片で、5が口縁部破片であり、共に、同時代中期後葉曾利式に、6は、口縁部破片で、同時代中期末葉加曾利E4式に、それぞれ比定されるものと思われる。



第19図 No. 7 トレンチ出土土器

(8) No. 8 トレンチ

牛石1059と1058番地水田の間に設定した。

土層（第20図）

第Ⅰ層 瓦礫混りの土層で、道路敷となっていた土層である。

第Ⅱ層 褐色土層で、かつての耕作土と思われる。

第Ⅲ層 粘性が弱く、若干スコリアを含有した里色土層である。

第Ⅳ層 スコリアを多量に含有した暗褐色土層である。

第Ⅴ層 スコリア・褐色土ブロックを多量に含有した暗褐色土層である。

第Ⅵ層 黒褐色土層（F・B層）である。

第Ⅶ層 ソフトローム層である。

第Ⅷ層 ローム層である。

遺物（第21図）

本トレンチからは、第Ⅳ層中から縄文時代中期後葉曾利式期の土器片が若干出土しただけである。第 図の土器片は、胴部破片で、曾利Ⅲ式に比定されるものと思われる。



第20図 No. 8 トレンチ土層図

(9) No. 9 トレンチ

牛石1074と1075畜地水田の間に設定した。

上層（第22図）

第Ⅰ層 瓦礫混りの土層で、道路敷きとなっていた土層である。 第21図 No. 8 トレンチ出土土器

第Ⅱ層 褐色土層で、かつての耕作土と思われる。

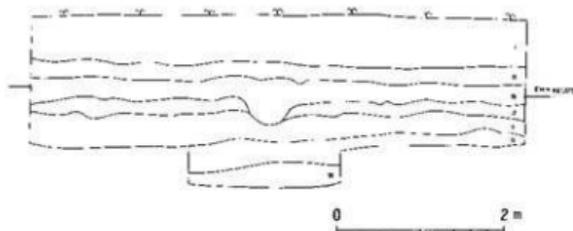
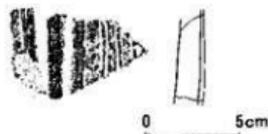
第Ⅲ層 粘性が弱く、若ドスコリアを含有した黒色土層である。

第Ⅳ層 スコリアを多量に含有した暗褐色土層である。

第Ⅴ層 スコリア・褐色土ブロックを多量に含有した暗茶褐色土層である。

第Ⅵ層 黒褐色土層（F・B層）である。

第Ⅶ層 ソフトローム層である。

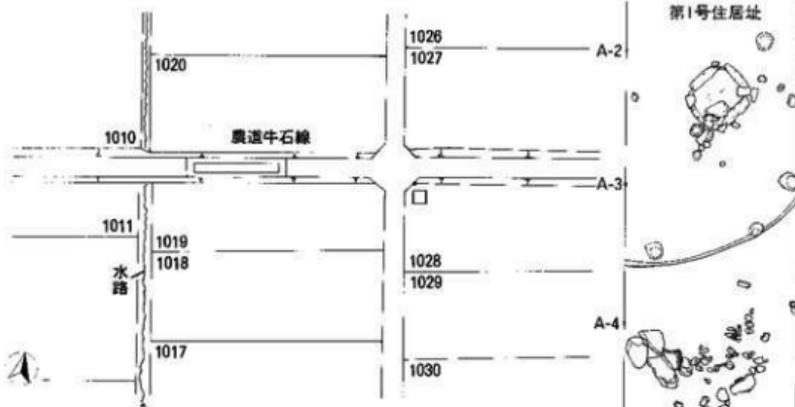


第22図 No. 9 トレンチ土層図

3. 拡張区調査の成果と概要

(1) 第1拡張区

第1拡張区は、No.1トレンチとNo.2トレンチを中心に拡張したもので、牛石1020と1019番地水田の間の農道牛石線に設定された。



第23図 第1拡張区位置図

遺構 (第24図)

本拡張区からは、第 図のとおり、縄文時代中期曾利式期の住居址3軒、集石遺構などが検出された。

第1号住居址 (第25図)

A-1～3区において検出された住居址で、全貌を明らかにすることはできなかったが、円形プランを呈するものと思われる。

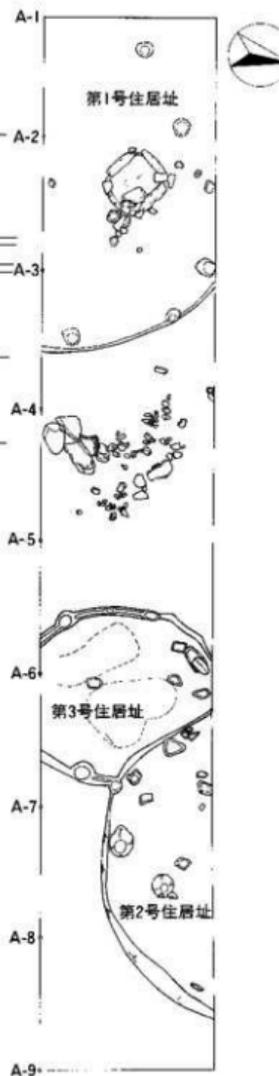
A-2区において、東側の炉石が抜かれた石囲炉が検出された。この石囲炉は、4個の長大な河原石によって、80cm×90mのほぼ正方形に組まれたものであった。

床面は軟弱なもので、柱穴と思われるピットが5ヶ検出されている。

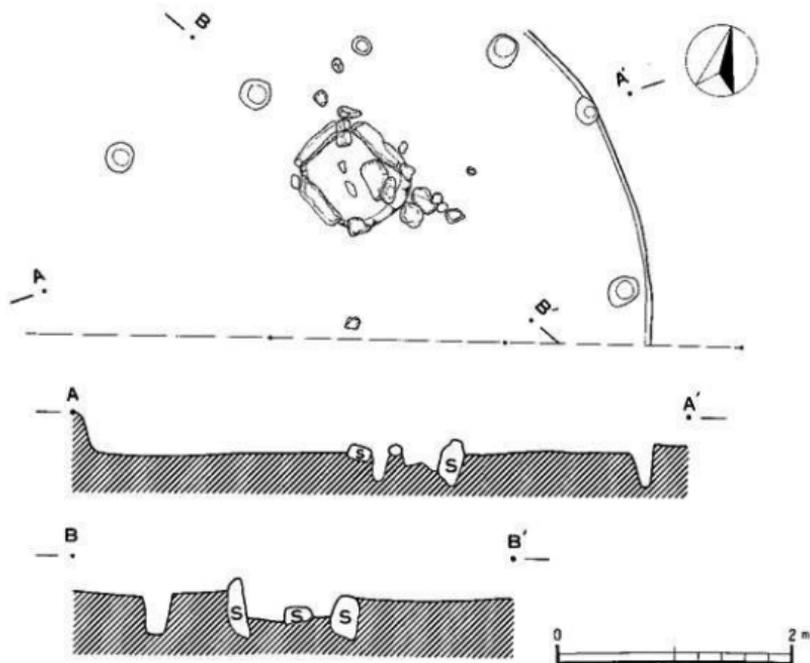
本住居址は、出土遺物より曾利V式期の所産と推定される。

(遺物)

第26図-1～3は、住居址の床直及び炉石上から出土したもので本住居址の時期を決める資料である。



第24図 第1拡張区全体図



第25図 第1号住居址遺構図

これらの内、1は口縁部平縁の深鉢形土器で、口縁部に一条波線文が巡らされ、その直下より、棒状施文具にて区画文が施され、区画内に櫛歯施文具によって条線文が充填されている。

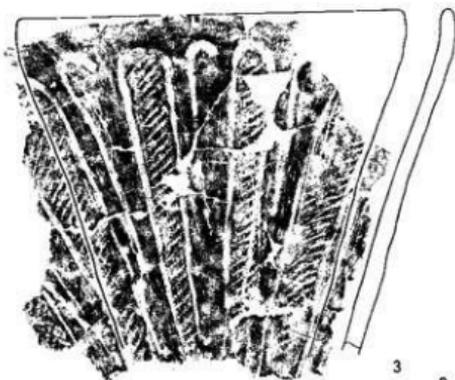
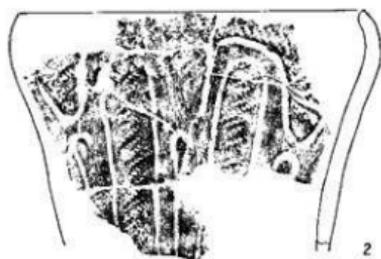
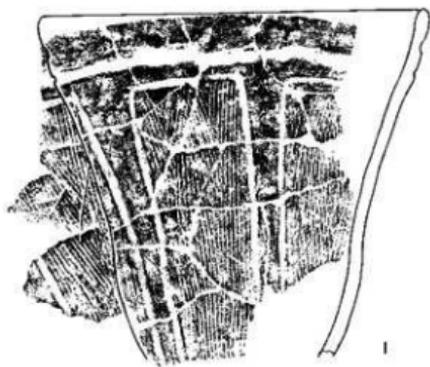
2・3は、口縁部内湾する深鉢形土器で、磨消縄文とワラビ手状波線文が施されている。

この1～3は、縄文時代中期末葉の曾利V式の古い段階のものに位置付けられると思われる。

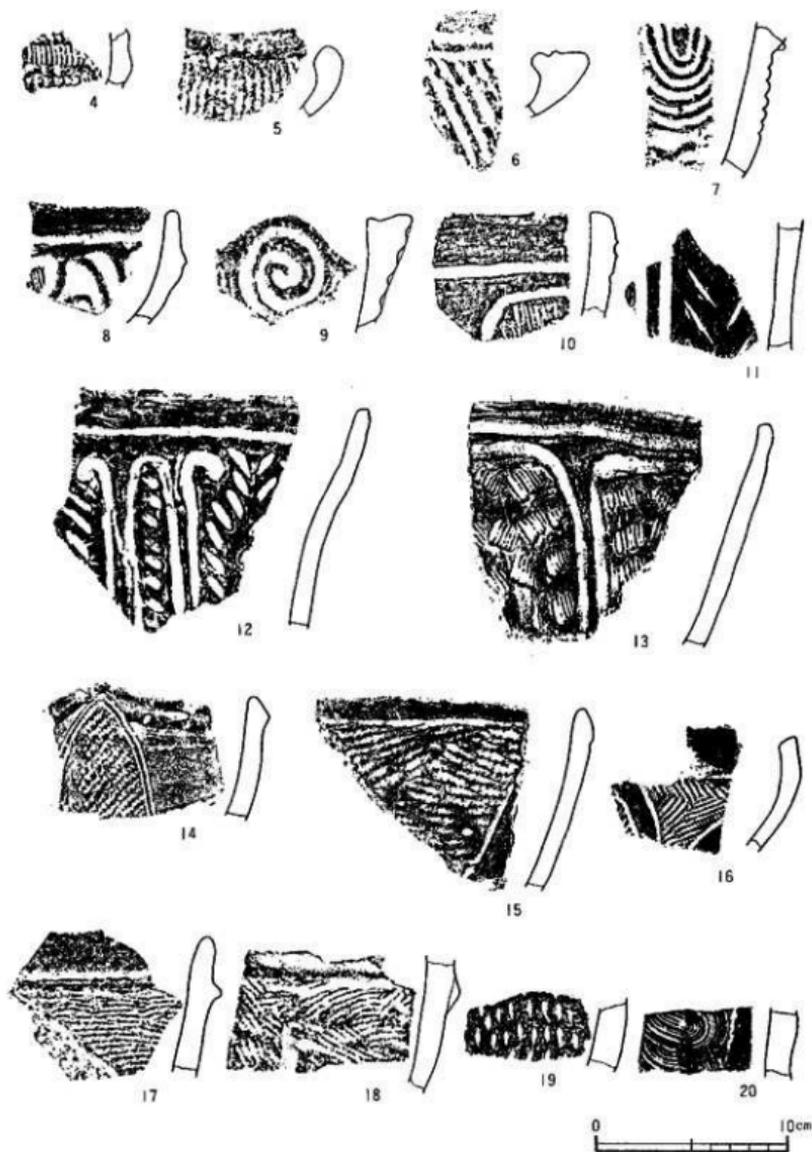
第27・28図は、同住居址の床直及び覆土中より出土した土器片で、4はへら状施文具と棒状施文具によって押しき文が施されたもので、縄文時代中期中葉新道式に、5は口縁部破片で縦走る縄文が施されたもので、同時期井戸尻式に、また、6・7は重弧文が施された口縁部破片で、同時期曾利Ⅱ式に、それぞれ比定されるものと思われる。

9～25は、1～3と同時期に位置付けられるもので、曾利V式の古段階（9～13・19・20～23）に属するものと、加曾利E4式の古段階（14～18・24・25）とが認められる。

第29図は、本住居址より出土した石器で、1は安山岩製の石皿の破片であり、2は凝灰岩製の凹石の破片である。



第26图 第1号住居址出土土器(1)



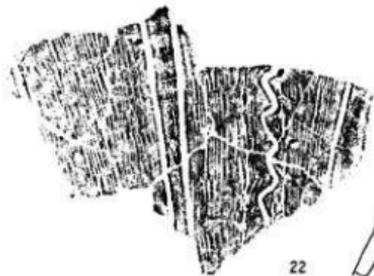
第27图 第1号住居址出土土器(2)



20



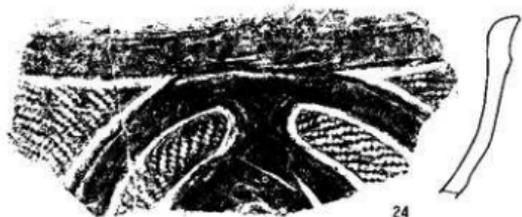
21



22



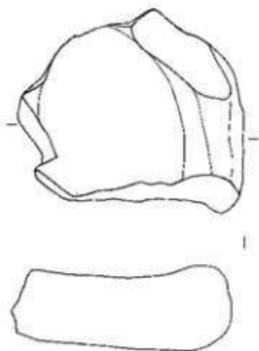
23



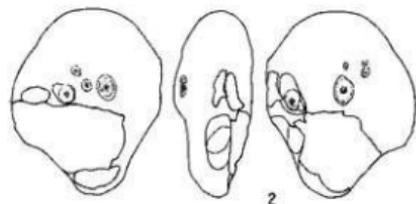
24



第28图 第1号住居址出土土器(3)



1



2

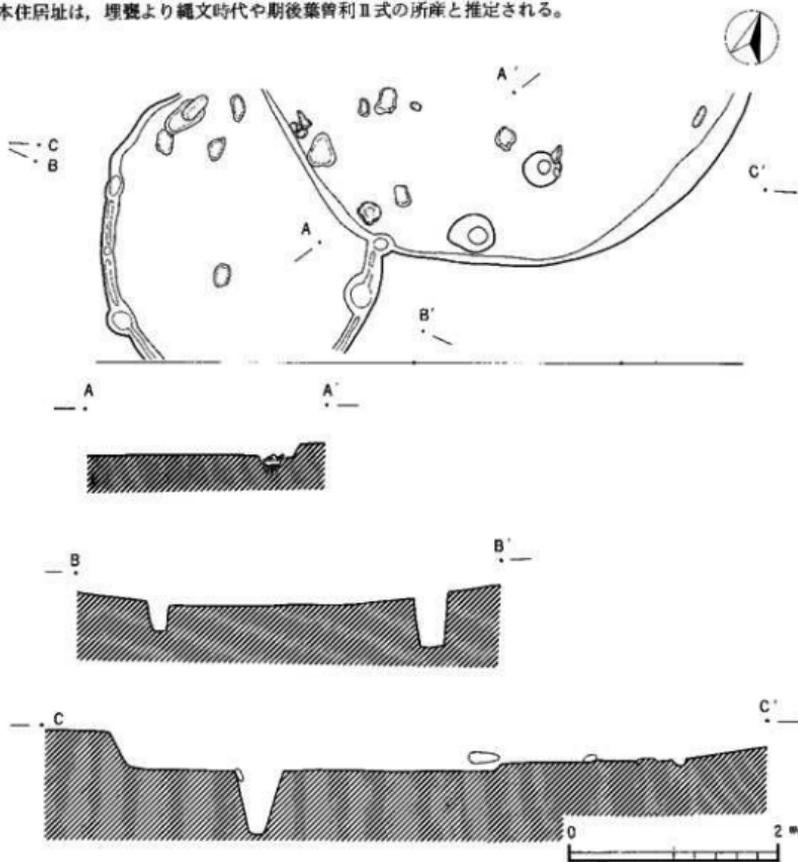


第29图 第1号住居址出土土器

第2号住居址（第30図）

A-6～8区において検出された住居址で、金貌を明らかにすることはできなかったが、円形プラを呈するものと思われる。床面は軟弱であり、柱穴と思われるピットが2ヶ検出された。また、住居址南壁近くで埋甕（第31図-1）が口縁部を上にした状態で出土した。

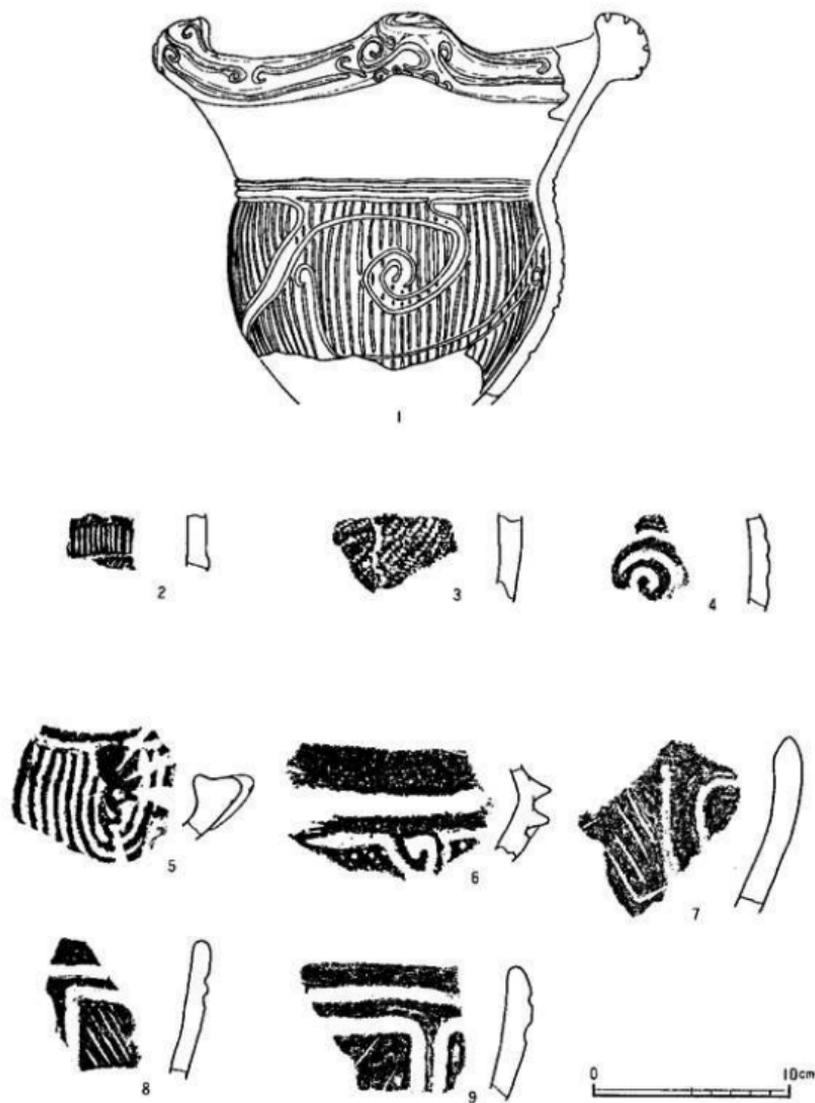
本住居址は、埋甕より縄文時代や期後葉曾利Ⅱ式の所産と推定される。



第30図 第2・3号住居址遺構図

（遺物）

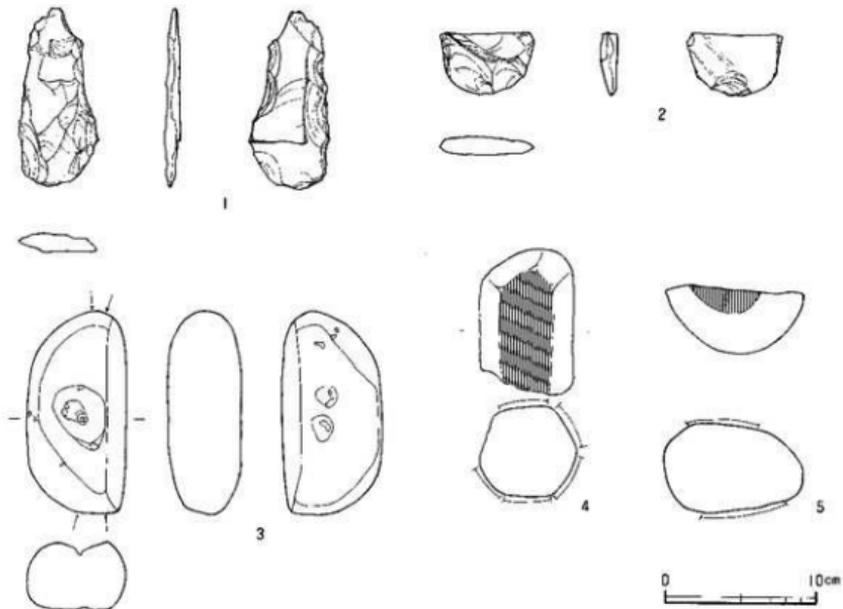
第31図-1は、本住居址の埋甕として用いられていたもので、口縁部の一部と底部が欠損している。器形は、口縁部外反した深鉢形土器で、肥厚された口縁部に棒状施文具で「S」字状の波線文が、また、無文の頸部直下には2条の波線文が施され、胴部には半截竹筭による条線を地文として、渦巻状の波線文が施文されている。



第31图 第2号住居址出土土器

2～9は、本住居址覆土中から出土したものである。

第32図-1～5は、本住居址出土の石器で、1・2は頁岩製の打製石斧で、3は多孔質安山岩製の磨石で、表・裏面に漏斗状のくぼみが認められる。4・5は凝灰岩製の磨石で、4は角棒状を呈している。



第32図 第2号住居址出土石器

第3号住居址 (第30図)

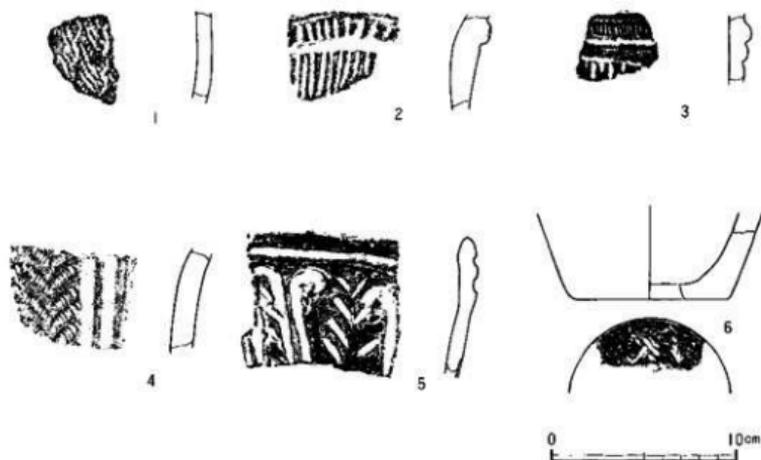
A-5・6区において検出されたもので、直径約3m程の小さなもので、床面には焼土と炭化物が堆積していた。床面は軟弱であり、炉は検出されなかったが、壁際に周溝と柱穴が検出された。

(遺物)

第 図は、本住居址出土土器であるが、ほとんど小破片であった。

1は、胴部破片で結節縄文(RL)が、2・3は、刻みが施された隆帯文が、それぞれ施文され、1は、縄文時代中期初頭五領ヶ台式に、2・3は、同時期中葉藤内式に、それぞれ比定されるものと思われる。

4～6は、同時代中期末葉曾利V式古段階に比定されるものと思われる。



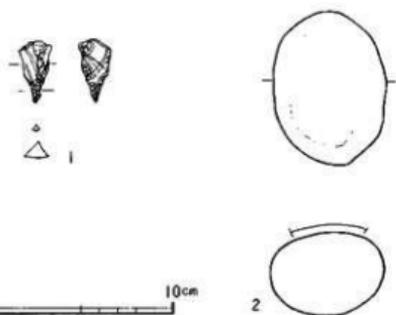
第33図 第3号住居址出土土器

第 四-1・2は、本住居址出の石器で、
1は、黒曜石製のドリルで、2は凝灰岩製の
磨石である。

遺 物

土 器 (第35～38図)

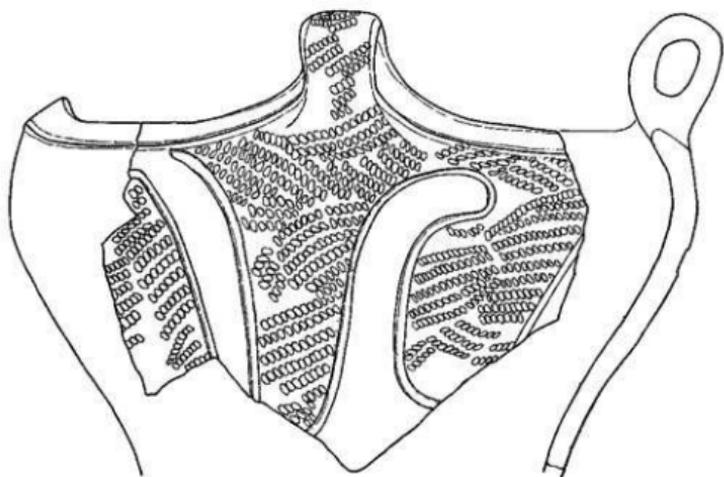
第35図-1・2は、A-3・4区におい
て集石と共に出土したもので、縄文時代中
期末葉加曾利E 4式に比定されるもので、
1は、口唇部に橋状把手が付く深鉢形土器
で、充填縄文が、2は、口縁部が小波状を
呈する深鉢形土器で、磨消縄文が、それぞれ施されている。



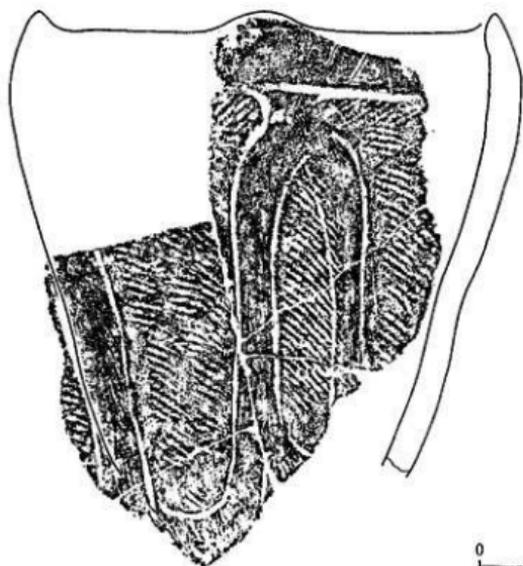
第34図 第3号住居址出土土器

第36・37図は、本地区から出土した土器片で、類に分類される。

第1類(第36図-1) 結節浮線文が施されたもので、縄文時代前期末葉十三吾提式に比定される。
第2類(第36図-2・3) 鋸歯状文が施されたもので、同時代中期初頭五顔ヶ台式に比定される。
第3類(第36図-4・5) 竹ペン状の鋭い工具による押し引き文が施されたもので、同時代中期中葉



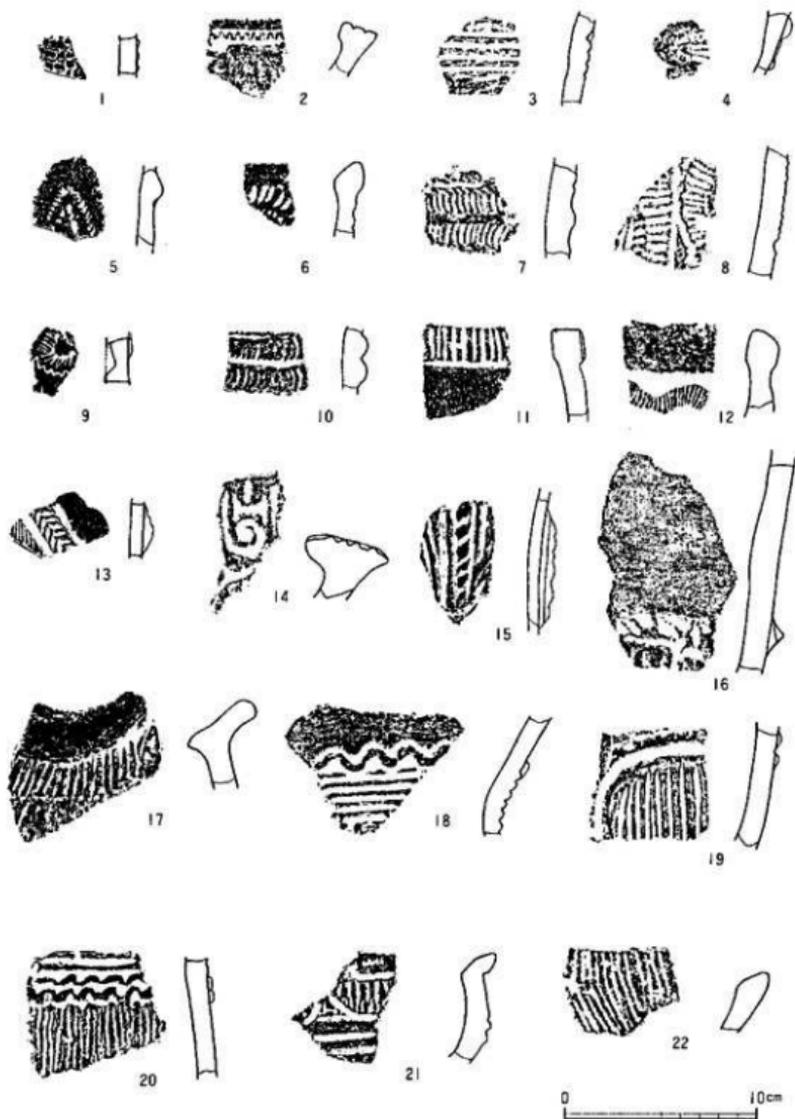
1



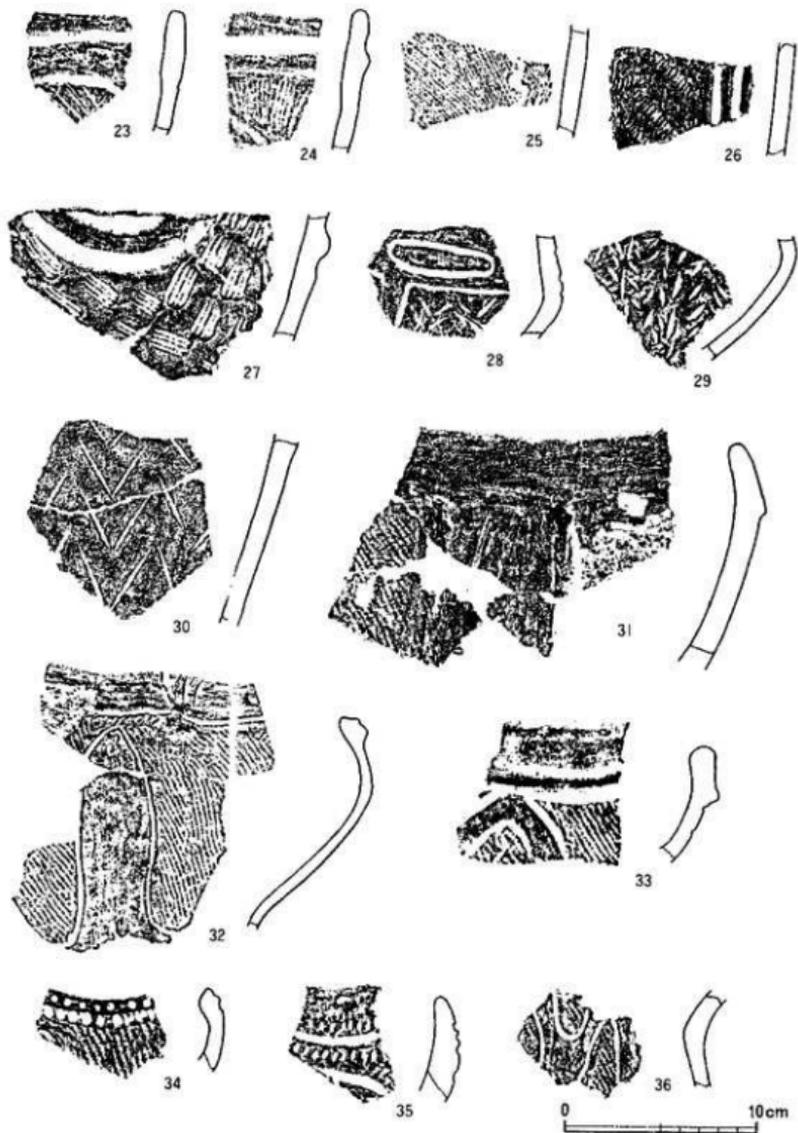
2



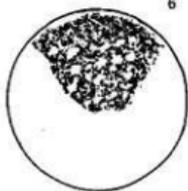
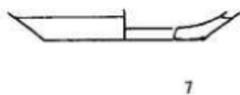
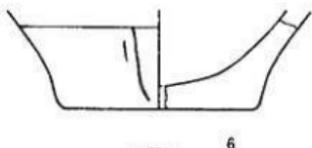
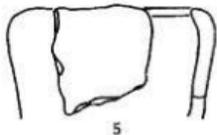
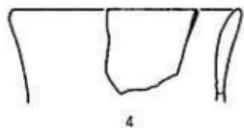
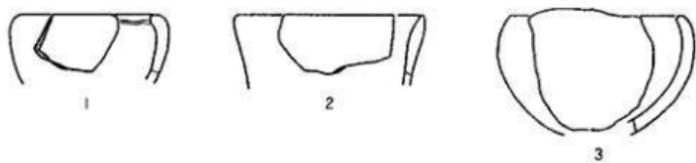
第35图 第1组强区出土土器(1)



第36图 第1坭颈区出土土器(2)



第37图 第1 狄茨区出土土器(3)



第38图 第1 坩埚区出土土器製品

新道式に比定される。

第4類(第36図-6~12)、ヘラ状の施文具による巾広の連続刺突文が施されたもの(6~9)や、刻み入りの隆帯が施されたもの(10~12)で、同時期藤内式に比定される。

第5類(第36図-13~17)、刻み入りの隆帯文(13・15・17)や浮刻手法による文様が施されたもので、同時期井戸尻式に比定される。

第6類(第36図-18~22)、小波状を呈する貼付文が施されたもの(18・20)や、重弧文が施されたもの(22)が認められ、同時期曾利Ⅱ式に比定される。

第7類(第37図-23~30)、同時代中期末葉曾利Ⅴ式古段階に位置付けられるもので、半截竹管によって羽状条線が施されたもの(23~25)、櫛歯状施文具によるもの(26・27)、ヘラ状施文具によるもの(28~30)が認められる。

第8類(第37図-31~36)、第7類と同時期を成す加曾利E4式に比定されるもので、隆帯文によって区画されるもの(31)と、波線文によって区画されるもの(32~36)が認められ、35・36のように利突文が施されたものも認められる。

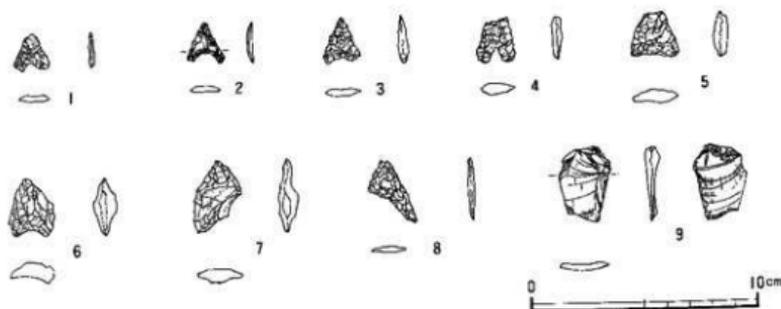
土製品(第38図-1~11)

1~5は、手づくねによるミニニチュア土器の破片で、1・3は碗形土器、2・4・5は深鉢形土器である。

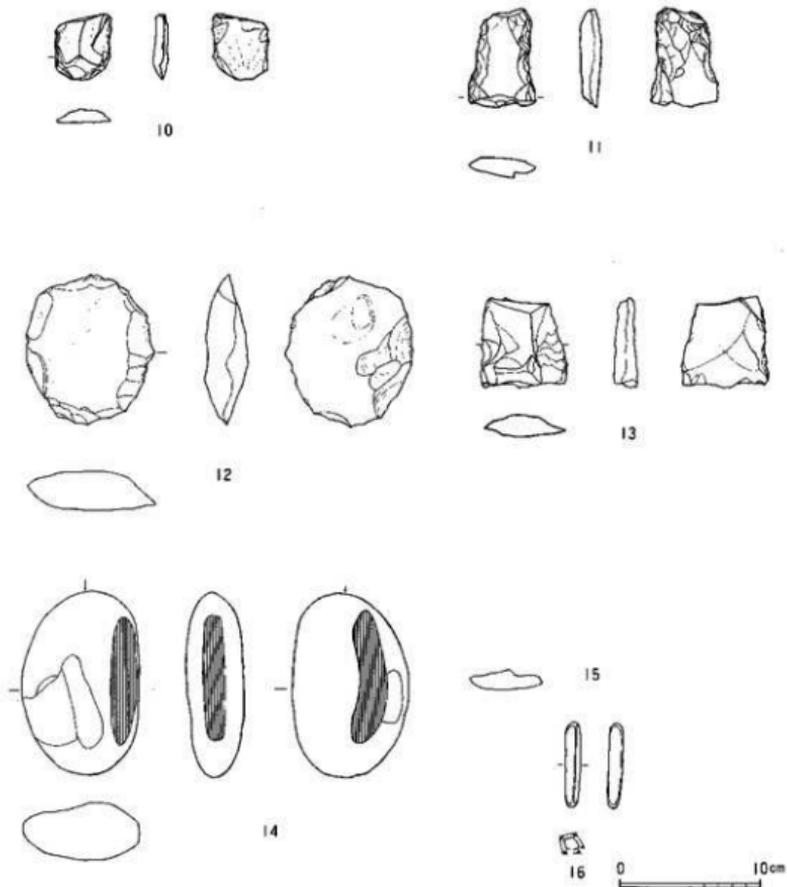
6・7は底部片で、6はアンペラ痕が認められ、縄文時代中期のものと思われ、また、7は糸切り痕が認められ、土師式土器である。

8~10は、周りを「丁寧」に磨かれており、土製円盤と思われる。また、11には、両側に挟りが認められ、土器片蓋と思われる。

第39・40は、本地区出土の石器で、1~8は黒曜石製の石鏃で、これらの内、4・5は先端部が、また、7・8は脚部が欠損している。



第39図 第1埴原区出土石器(1)



第40圖 第1坩張区出土石器(2)

第40図-10・11・13・15は、打製石斧で、10・11・13は頁岩製、15は粘板岩製のものである。12は、頁岩製のスクレイパーで、14は、凝灰岩製の磨石である。16は、断面が四角形状に磨られた小さな角棒状のものでした。

(2) 第2拡張区

第2拡張区は、No 5 トレンチを中心に拡張したもので、牛石1040と1039番地水田の間の農道牛石線に設定された。



第41図 第2拡張区位置図

遺構 (第43図)

本地区からは、第 図のような、配石遺構が検出された。この配石は、東西方向及び南北方向に直線的に連なるもので、同一レベル上に配されている。

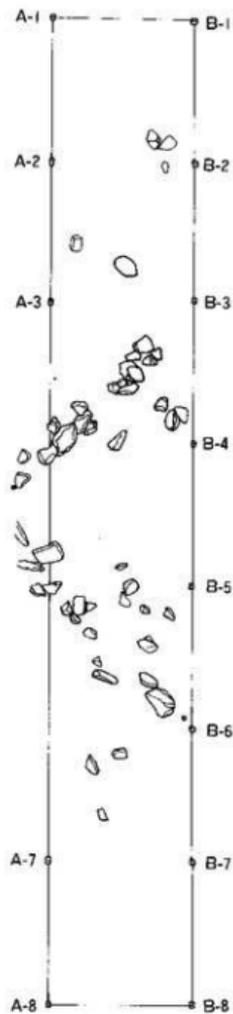
遺物 (第44~46図)

第 図-1 は、A-2 区から出土した縄文時代晩期安行3 a 式に伴なう鉢形土器で、口縁部と胴部に三叉文が施されている。

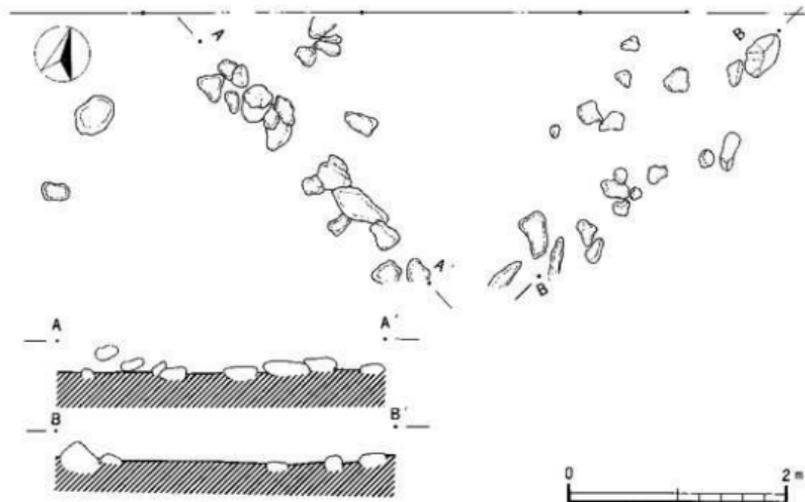
2 は、土師式土器の底部で器内面に暗文が認められる。

第 図-3 ~10 は、同地区出土の土器片で、3・4 は縄文時代中期初頭五領ヶ台式に、5 は同時代中期中葉新道式に、6 ~9 は同時代中期後葉曾利式に、それぞれ比定されるものと思われる。

10 は、周りが磨かれており、土製円盤と思われる。

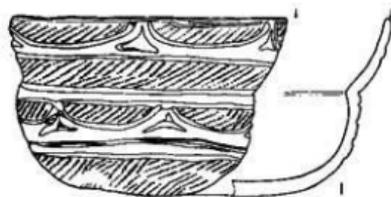


第42図 第2拡張区全体図

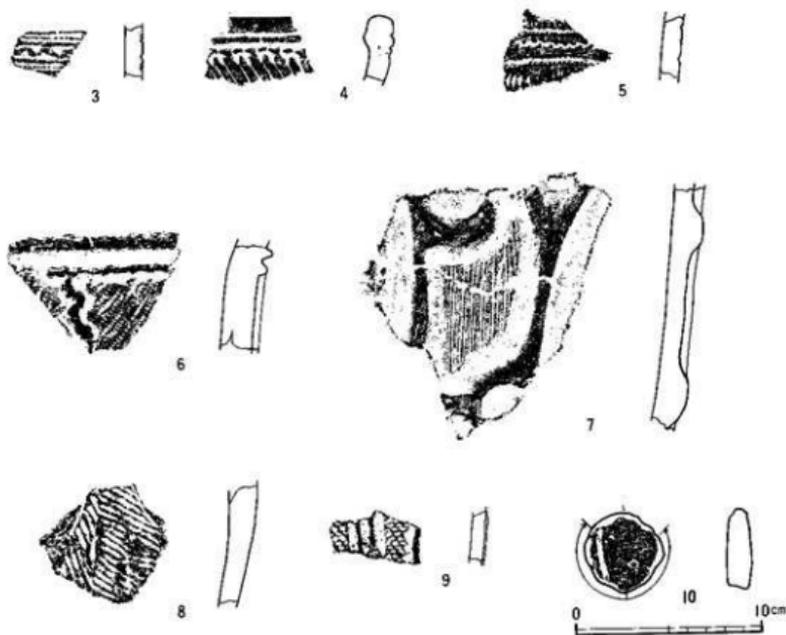


第43図 第2拡張区配石遺構図

第46図-1~7は、同地区出土の石器で、
 これらの内で、1~3は安山岩製の磨石、4
 は緑色凝灰岩製の磨製石斧、5は凝灰岩製の
 磨石、6・7は石鏃で、6は頁岩製、7は黒
 曜石製のものである。



第44図 第2拡張区出土土器(1)



第45図 第2拡張区出土土器(2)

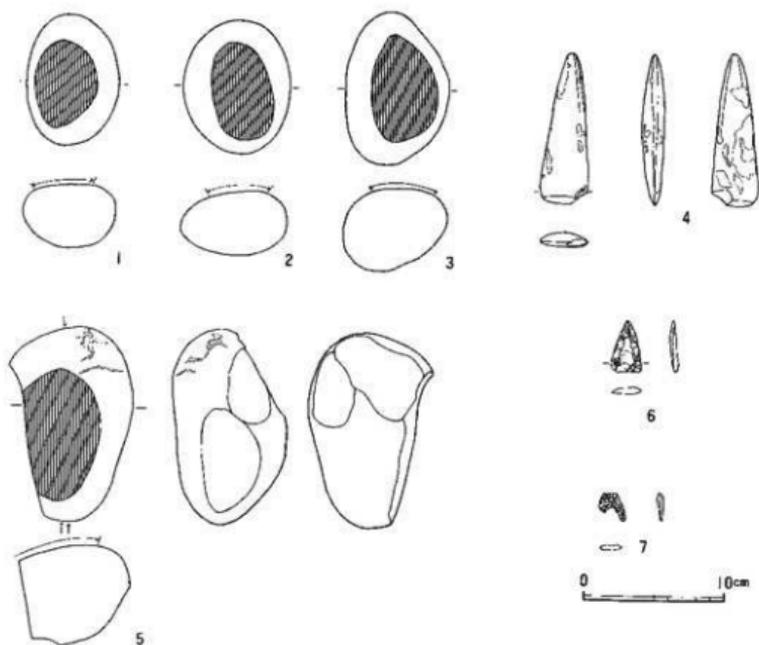
Ⅳ ま と め

牛石遺跡の発掘調査は、今回で4度目に当たるが、いずれも限定された調査であったために、遺跡の全貌を明らかにするには至っていない。今回の調査も、遺跡が立地する厚原地区の真中を東西に走る農道牛石線の改良工事に伴うものとして実施されたために、ごく限られた中での調査であった。

これまでの調査で、牛石遺跡は東側地区に奈良・平安時代の集落址が、西側地区には縄文時代中期末葉期の配石遺構群が確認されている。

これらの内、西側地区で確認されている配石遺構は、直径50mにおよぶ大環状配石をはじめ、大規模なものであったが、これに伴う住居址等の生活址が検出されていなかったために、配石遺構群の性格を考える上で、不十分なものであった。

今回の調査では、調査対象が限定された中ではあったが、配石遺構群と同時期の住居址が検出でき



第46図 第2拡張出土石器

たことは、大きな成果であった。

つまり、牛石遺跡では、縄文時代中期末葉期の巨大な屋外配石遺構群と共に、住居址などの生活址の存在が確認されたことにより、同時期における集落の様相を示す貴重な資料となり得るものと思われる。

このような例は、富士山をはさんで反対側に位置する静岡県富士宮市千居遺跡においても認められ、千居遺跡でも言うまでもなく、大環状配石と共に住居址群や土拡墓群が検出されている。

縄文時代中期末葉の配石遺構が発見されたこの千居遺跡と牛石遺跡は、くしくも縄文時代中期の終焉とともに、一時幕を閉じた遺跡であり、両遺跡の様相は曾利式土器分布圏の縄文時代中期末葉における集落址のあり方を純粋な形で留める重要な遺跡と思われる。

おわりに、本調査及び本書作成に御協力・御指導を賜った都留土地改良事務所・県文化課の各位をはじめ、関係諸氏に対し、厚く感謝申し上げます。



調査前の農道牛石線



発掘調査風景



第1地区 発掘調査風景



第1号住居址



第1号住居址 (石囲い炉)



第2号住居址



第2号住居址（埋裏出土状態）



第2号住居址（ビット）



第3号住居址



第2地区調査風景



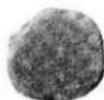
第2地区 配石出土状态



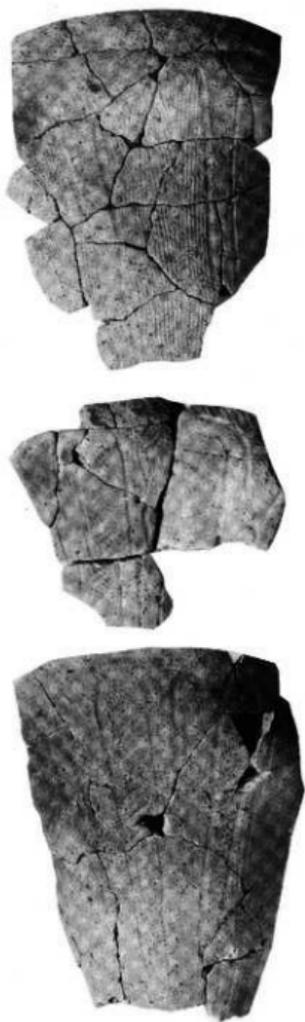
第2地区 配石出土状态



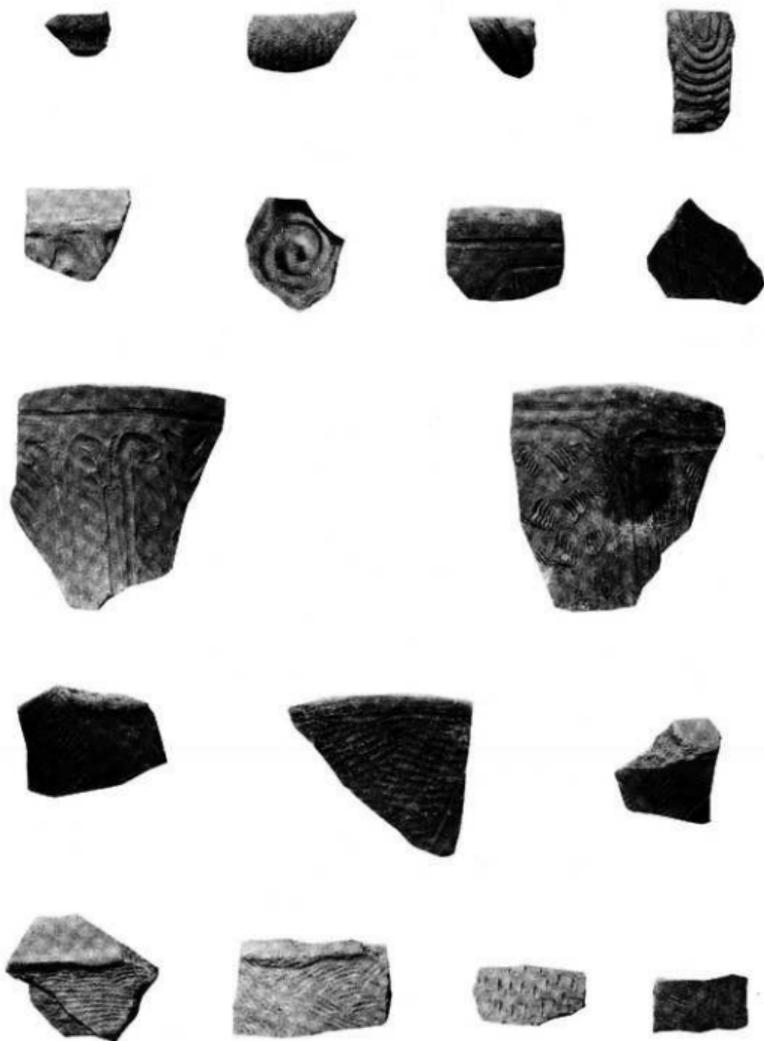
トレンチ出土土器 (上段No.3 トレンチ, 中段No.4 トレンチ, 下段No.6 トレンチ)



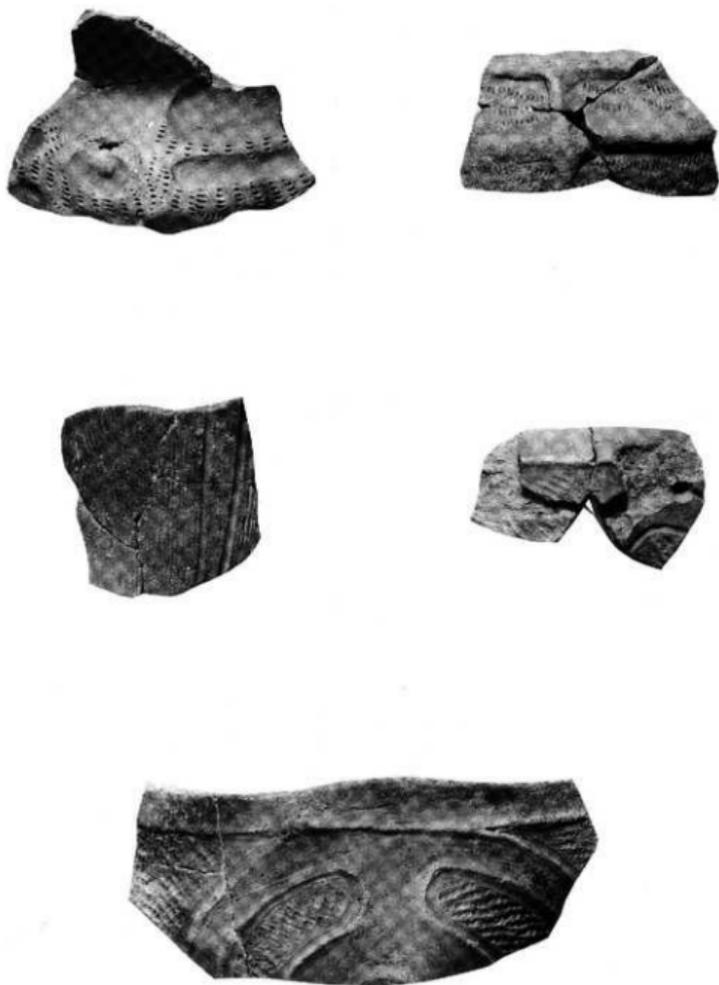
トレンチ出土土器 (上段No.7 トレンチ, 下段No.8 トレンチ)



第1号住居址出土土器(1)



第1号住居址出土土器(2)



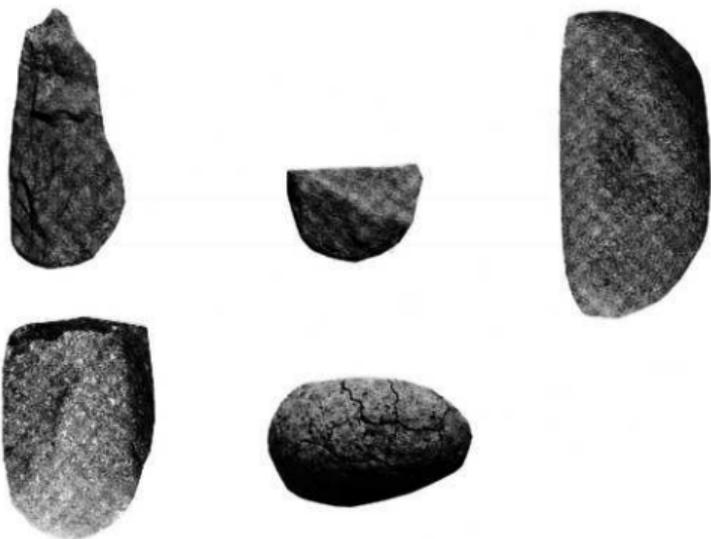
第1号住居址出土土器(3)



第1号住居址出土石器



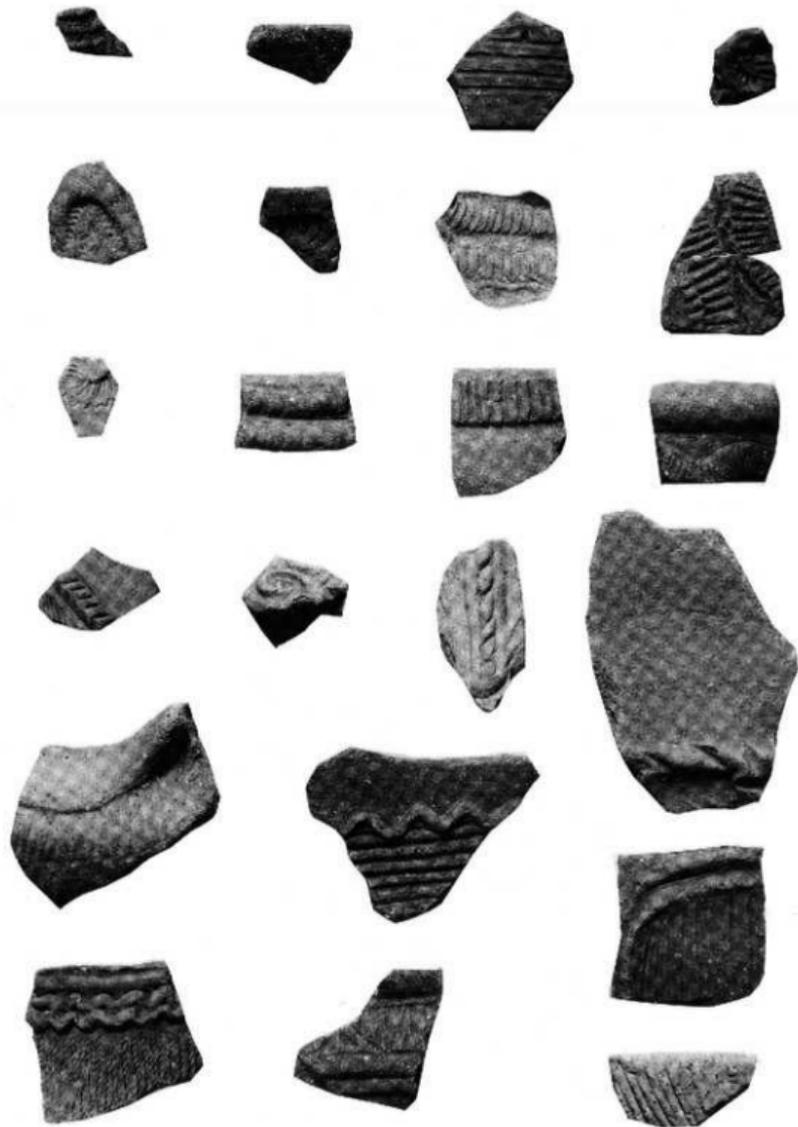
第2号住居址出土土器



第2号住居址出土石器(上段)・第3号住居址出土石器(下段)



第1地区出土土器(1)



第1地区出土土器(2)

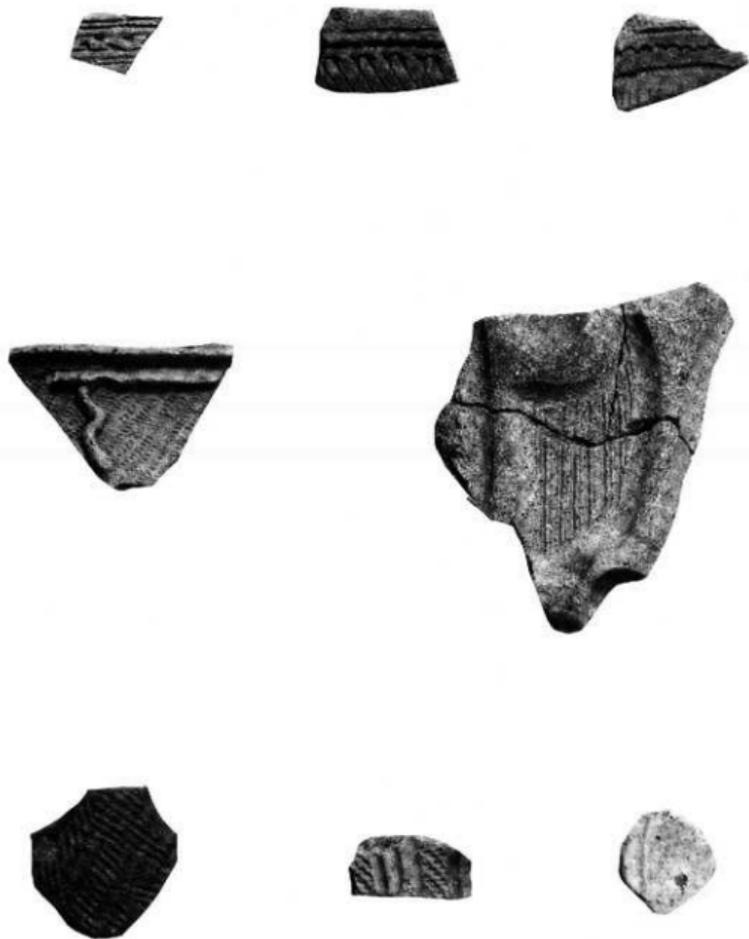


第1地区出土土器(3)

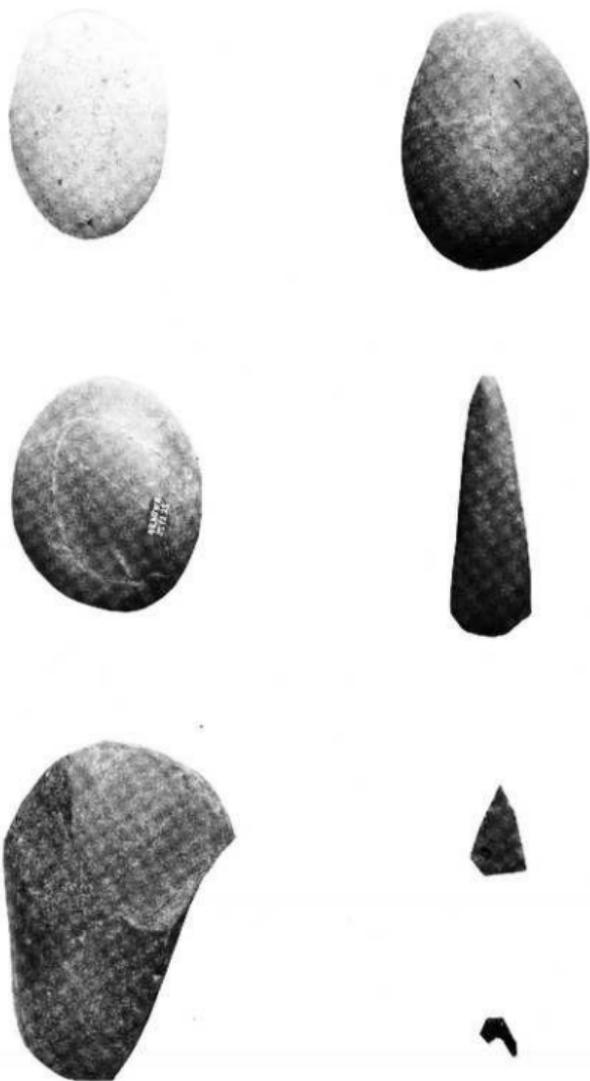




第2地区出土土器(1)



第2地区出土土器(2)



第 2 地区出土石器

牛石遺跡

農道牛石線改良工事に伴う
発掘調査報告書

発行日 昭和 62 年 3 月 31 日

編集 都 留 市 教 育 委 員 会

発行 都 留 市 教 育 委 員 会
都 留 市 地 改 良 事 務 所

印刷 三 友 社
東京都千代田区飯田橋 3-3-11
TEL 03-261-6811 (代)

